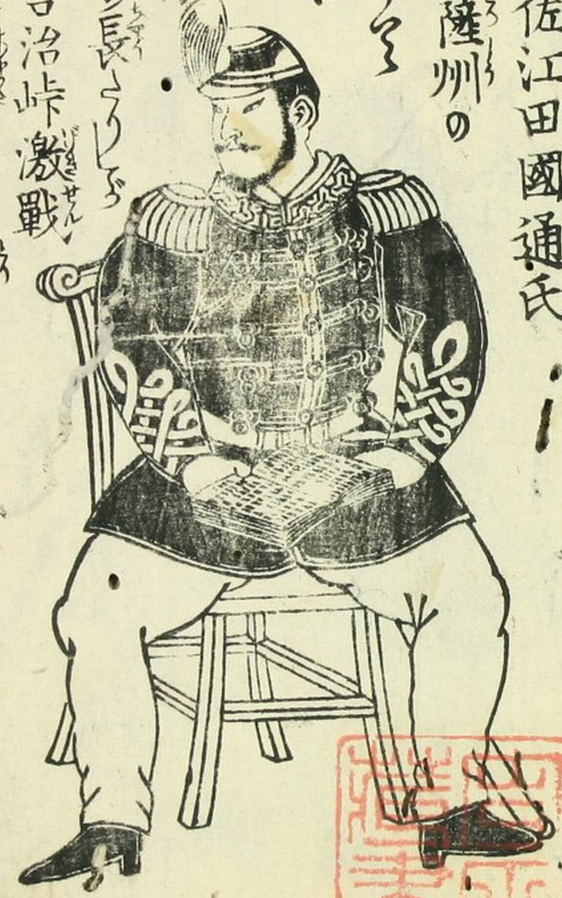
鹿ノ子
児島
戦
記
第九
篠田夏次郎編
加々吉板
大川良

篠田仙果 補
永富孟高 画

繪本 鹿児嶋戦記

東京 青雲堂 板



陸軍少佐江田國通氏

江田氏ハ薩州の生れ[illegible]練兵法ハ熟[illegible]れバ近衛一聯隊二番大隊の長さりしが三月四日吉治峠激戰の際暴徒數多うち取[illegible]つゝ戰死せとゞられたり

福岡縣下の賊魁
越知彦四郎

鹿兒嶋縣令
桂衛門

鹿兒島戰記五編上

東京 篠田仙果編

再び説植木口の官軍と吉治越の田原坂くい守るの兵とのこ置

二股より進軍

ゑもふ暴徒ハ雨天の心をもたり

沙汰ものもしん狼狽まつりかう

鐵炮ハ先ごあれバ火薬の儒ふ

うゑ果實ハ止ることなきぞ

墨場と捨て散乱のゆゑ

官軍極氣狂へ

くゝの迫暴徒宿と焼拂へ

○廿二日

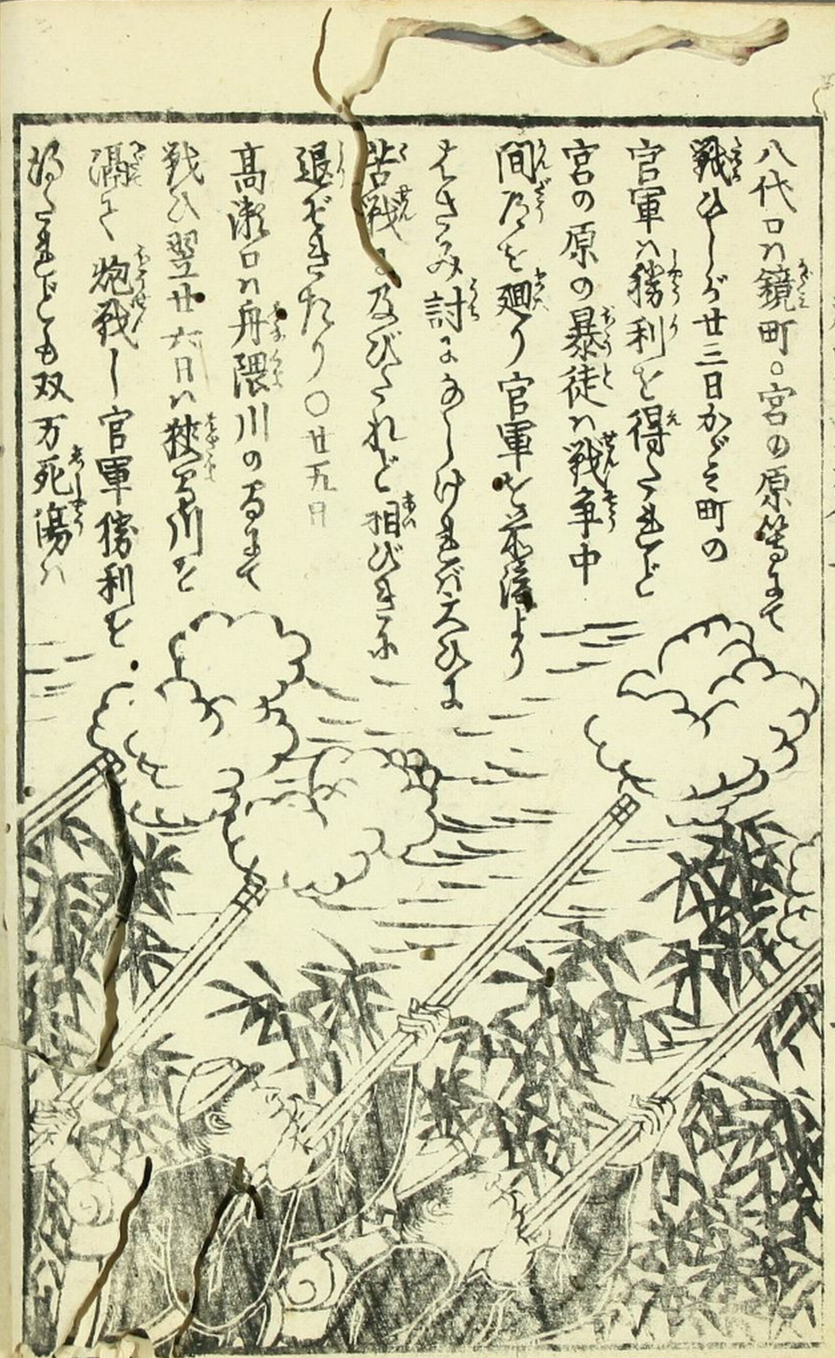
山鹿口の鹿兒島勢ハ

ふもだ福〜や思ひけん

一トくい隈府まで一トうゑ植木街道へ

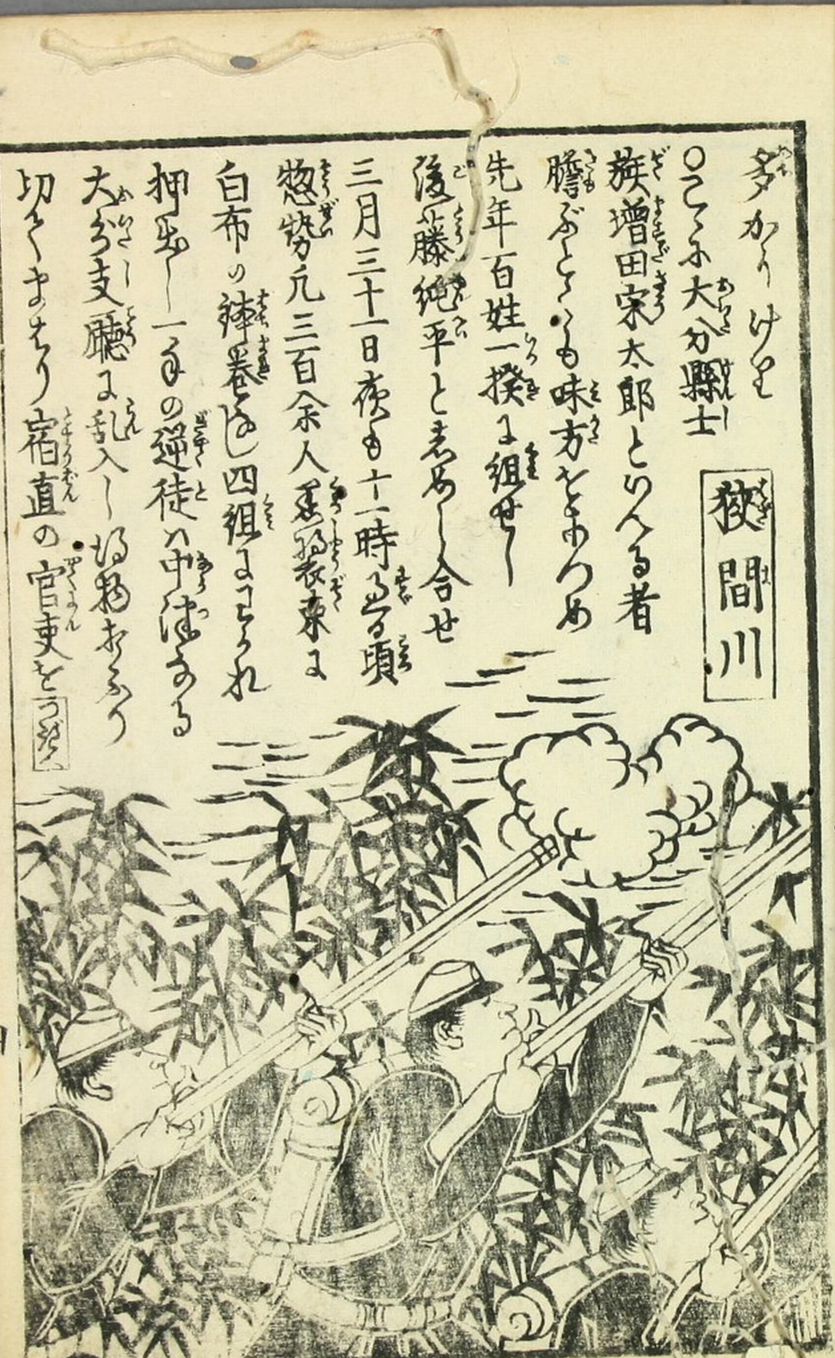
引あげゝ

八代口の鏡町。宮の原等にて戦ひ廿三日かゞを町の官軍へ勝利を得たれども宮の原の暴徒へ戦争中間乃を廻り官軍を本陣より大きゝみ討ふあ〜けまぶ大ひよ苦戦。乃びくれど相びきふ退ぞきたり○廿五日高瀬口へ舟隈川のほとり戦ひ翌廿六日へ被ひ川を渡り砲戦〜官軍勝利を。ほ〜ほとも双方死傷へ



多かりけり

○こゝふ大分縣士族増田宋太郎とのゝる者騰ぶと〜も味方をゆゝあ先年百姓一揆を組せ〜後藤純平と者ゝ〜合せ三月三十一日夜も十一時ゝる頃惣勢凡三百余人黒装束を白布の襷巻ゆ四組よりられ押寄〜一るの逆徒へ中ほゝるる大ゝ支廳を乱入〜ほ和おゝふ切〜まもり宿直の官吏をうぶ



暴殺し従者中銃を奪ひとり
大をそのちく支廳をやき又
一ト組の殺害察官署へ乱入し
官报あどを奪ひとり
一ト組の縣吏堀忠氏の
邸宅を襲ふて堀忠氏と
殺害し同氏が
懐中の金をとりもち
一ト組の縣吏馬渕
氏をうち死さんと
仲る町の角鋪を
襲ふまる剛氏の

増田宋太郎

別府村へ
陣をとる
けたたゝ
各所へ
報せ

三日浅間艦の海軍兵士
二大隊別府村へ
無用の戦うち
その注あり
ひとくふ裏より
忍び逆徒の
雑をのがれ
さて中津の
賊徒どもの
懲役場へ
宇佐郡
唐島村へ
区長の
宅をやき
巡査の抜刀隊へ賊徒の
背後へまわり

視隊

百有余人を捕ふ
○中津の賊と苦戰
合せし福島縣士族
四日宮の原より二重峠へ官軍

越知彦四郎○村上彦十○久見彦○加藤邸。
久世芳磨等ハ同縣の士族五百余人を
煽動し二月廿八日七隊村人屯集せ
しより下間人ハ久世官軍ハ
出兵し廿九日福岡より春〜三十日
明石釜村より我端をひらき
曲淵より敵徒の

久世芳磨

隊長下間
○久世の
両人ハ
ともに死
村上彦十

元切り二日本留町へ
せめ入り鹿児島
方の賊を追ひ所を
焼ひらき〻ひ〻遣田野の
暴徒を狙撃ち時ハ尾の
本陣なる西郷隆盛
こゝもとゝきゝ味方の
死傷多ければ
新たの兵を
つのるべし〻
隊長なる別府新助○遣見十郎太
○桂山久兵衛の三人をもつぬき

遣見十郎太

別府新助

いとゝき鹿児島のうち
兵を募りて有りければ
かゝることなりぬと
三人が鹿児島へ
帰郷なり
同郷の
大書記官
田畑常秋と
お供〻士族なる
迫ひ〻つゝ千五百人
召し集めの加治木より
八代街道を揃ひ出し

西郷隆盛

高島は佐の
引率せし
別働隊を
こちらへ〻
と玖摩川
まで〻押し
よせるを
官軍ハ川の
此方より
兵を配り

胸壁をつき防禦の術を
つくしたるもの鹿兒島
方ハ千五百人味方ハ
僅らふ三大隊ゆゑ
大ひなる苦戰
あるべふ
けるる

田畠常秋

鹿兒島戰記
第五篇上畢

010190510439

吉田愛之